

情報処理科学における現代言語学研究の問題に関する批判的検討 (VII)
—「広義のシステム論」に立脚し、詩(創造)に関する
言語学的諸問題に対する批判的考察(其の二)—

中村 孔治*, ポミコル・ヤン**

Eine kritische Untersuchung von Problemen der modernen Linguistik
anhand der Informationswissenschaft

—Eine kritische Betrachtung von linguistischen Problemen
in Verbindung mit Poesie (Das Schaffen) aus
der Sicht der "Erweiterten System Theorie"—

Koji Nakamura* and Jan Pomykol**

(Received May 29, 1992)

Previously we wrote six papers about information science relating to language theory on the subject of the Bases of Cognitive Scientific Techniques.

We are continuing the research into modern linguistics and language philosophy in the field of information science.

This time, we wrote about fundamental studies on the creation or origination of poems.

We described here the subjects above mentioned within the limits of fundamental studies from the viewpoint of the expanded System Theory, which was proposed by Koji Nakamura in May 1987.

Both of us have different mother tongues, German and Japanese, and are going to continue our research after this.

Eine allgemeine Übersicht

Zu keiner Zeit in der Geschichte ist der Mensch so problematisch geworden wie in der Gegenwart. Alle Wissenschaften zielen auf den Menschen und in ihm haben sie ihre sammelnde Mitte. Der Mensch und seine Kreativität ist die Achse, in der alle Wissenschaften zusammentreffen. In der Kreativität findet die Verklammerung statt. Kreative Leistungen des Menschen sind für den Erfolg in allen Lebensbereichen erforderlich in Wirtschaft, Forschung und Technologie, in Wissenschaft, Literatur und Kunst. Doch Kreativität und Freiheit des Menschen folgen ihren eigenen Gesetzen.

Die Funktion der Literatur ist als gesellschaftliches Gedächtnis zu verstehen. Sie zeigt, daß der schöpferische Prozeß Gesetzmäßigkeiten folgt, die wir erkennen und uns zunutze machen können. So lernen wir in der Literatur, die Kreativität ungeahnter Kräfte unseres Lebens zu aktivieren und unsere latente, aber oft blockierte schöpferische Kraft in allen Lebensbereichen wirksam werden zu lassen.

*電気工学科 (Department of Electrical Engineering)

**名古屋聖霊短期大学 (Nagoya Seirei Junior College)

中部大学非常勤講師 (Part-time Lecturer)

Akzeptieren wir die kreativen Beiträge der Literatur, dann drängt sich folgende Frage auf: Wie steht es um das Potential dieses kreativintuitiven Geistes, das zu Erkenntnissen bezüglich spiritueller, psychischer und metaphysischer Probleme beigetragen hat, im Hinblick auf Fragen nach der Natur der Wirklichkeit, dem Weg zur Selbsterfüllung oder dem Sinn des Lebens?

Diese Studie ist eine kritische Betrachtung linguistischer Probleme in Verbindung mit Poesie aus der Sicht der "Erweiterten System Theorie". Wir möchten zeigen, daß die Würde des Menschen, seine Freiheit und Kreativität eine Fortsetzung des Schöpfungswerkes ist. Die Geschöpflichkeit stiftet Brüderlichkeit unter den Menschen und bietet in der Poesie den tragenden Grund für den Auftrag und die Sendung der Menschheit. Die Kreativität und Poesie ist dabei nicht ein Mittel zur Aussage über Gott, die Welt und den Menschen, sondern es geht darum, den Sinn der Welt und des Menschseins zu erhellen.

1. まえがき

本研究は独乙語を母国語とする研究者と日本語を母国語とする研究者の二人の間で行いつつある共同研究のうち言語理論に関連するものの、二番目に発表する報告である。本報はさらに、以前中村が著した二つの書物⁽¹⁾⁽²⁾ならびに論文⁽³⁻⁸⁾を踏えたものである。

前報告⁽⁸⁾でフェルディナント・ド・ソシュールが彼の言語理論研究は、言語によって受けた「自由の束縛」から自由を人間の側に取りもどす目的で学問的努力を遂行した、と云った事を記述したが、以前の報告において、ノーマン・チョムスキーも同様に、人間言語は外的刺激や内的生理状態による支配から自由な、思考と自己表現の用具であるとする創造的側面を述べた事に触れた。

本研究においては前報⁽⁸⁾同様「人間の自由の喪失(言語による)」から自由を回復することを目標とすると共に、詩創作に関連し人間の創造性の問題研究の一端をも記述する予定である。本論文は(其の二)と記したように、前報⁽⁸⁾に続いて詩に関連して標記のテーマで発表するのであるが、筆者らのうち中村はいずれ日本創造学会に所属する予定となっている関係もあり、本報告では詩の創作を中心にとりあげ、自然科学工学諸分野を始め多くの分野で重要な問題となっている創造性開発の問題にも関連させて論ずる。筆者らは以前大学教授に関連して、創造性について論文⁽⁹⁾を発表しており、前記中村の書物⁽¹⁾⁽²⁾にそれぞれ創造性に関しても記述を行っている。

2. 創造性の情報処理科学的一考察

創造性に関する書籍及び研究論文は膨大な数に登っており、国内で容易に入手できるものでも非常に優れた内容の発表が多数あり、筆者らも報告⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾している。従って、本論文では標記テーマに沿い、情報処理科学的側面からのアプローチを主とし、他の数多くの側面からのそれはほとんど割愛した(言語理論や認知科学もここでの情報処理科学に包含される)。従来の日本における研究に比較し本論文では人間的側面に重点を置くこととする。

2-1. 創造的人間の問題

工学や自然科学の諸分野における研究者の多くは、T・クーンのいう通常科学的パラダイムの範囲でのみその研究活動を行っており、パラダイム変換に挑戦する研究者は極めて少数である。特に従来日本の研究者はこの傾向にあった。F・バロンは独創性に関する研究の発表、(F.Barron "The Disposition Toward Originality" (1963)及び "The Needs for Order and for Disorder as Motives in Creative Activity" (1963)共に、Scientific Creativity; Its Recognition and Development pp139-152 及び pp156-160 New York: Wiley)において科学の各分野の博士号予定者を被験者として特殊なテストを行い、彼が以前に行った研究から得た5つの仮説の検証を行っている。それは①独創的な人は、現象の中の複雑さと、ある程度のはっきりした不均衡を好む。②創造的な人は、精神力動的により複雑であり、より広い個人的視野をもっている。③独創的な人は判断においてより独立的である。④独創的な人は人一倍自己を主張し支配的である。⑤独創的な人は衝動を統御する向きとしての制止を受け入れない。の5命題であった。この中で特に注目すべきものは①の「混乱への欲求」であり、種々の画に対する反応で、混乱したまたは混沌とした形象への嗜好や未熟な形態の容認が創造性・独創性と相関があることを把握していることである。バロンはこれに加うるに、混乱に新しい秩序を求めることにおいて自己を信頼する創造的個人は、こうゆう態度を人生の早期の困難な対人関係から学んでいることを示唆していると、S.アリエティはその著書⁽¹⁰⁾で述べている。アリエティはバロンが結論的に示した12の創造的人間の特性のうち第7は幾分躊躇するが残りの11の特性は認めるとして上記の書物で紹介しているので引用する。一(i)非常に注意深い (ii)一部の真実だけを表現する (iii)他人が見ないようなものの見方も出来る (iv)

認識能力において独立し、それに極めて高い価値をおく (v) 自分の才能を価値により動機づけられる (vi) 一度により多くの観念を抱き、より多くの観念を比較し、従ってより豊富な統合を行う能力が極めて高い (vii) 強い性衝動をもち身体の数でもより強健でありはなはだ敏感である (viii) より複雑な人生を経験し、より複雑な宇宙を知っている (ix) 無意識の動機や幻想生活を、より知覚している (x) 自己に退行したり正常にもどったりすることを許す強い自我をもっている (x i) 恋愛や神秘体験のような場合、主観と客観の区別がある時期なくなることを容認する (x ii) 彼らの有機体の客観的な自由は、最大限に達しており、彼らの創造性はこの客観的自由の関数である。以上で創造的人間の特性が明瞭となった。この外、ルネッサンス的人間としての多元的創造性の一人に恵まれた例、病気と創造性、創造的人間の人格、個人における創造力の陶冶 (創造力と個人の教育) 等について論ずべきことも多いが割愛し他の機会に譲る。

2-2. 情報処理科学と創造性の問題

従来日本の学会に、欧米の研究には何でも尊敬を払い日本の研究には理解しうる限り叩き、理解を超えるものは黙殺するという、新しい研究に対処する悲しき後進国性があったことは否定し難い事実であった。筆者らの著書⁽¹⁾もその例の一つである (幸い若手の研究者には利用してもらっている)。佐伯胖著の書物⁽¹¹⁾の14頁以降「メタ理論」という言葉が用いられている。それは、研究者が世界を見て解釈する際に用いる、例えば「創造性とは本来こうゆうものだ」、「人間とはこうゆうものだ」といった、かなり広い一般的トピックスを包み込む仮説であるが、物理実験や思考実験で検証するものではなく、多くの理論や現象を解釈し方向づけ、本質的問題や研究の方向等に関する示唆を引き出すもので、研究者に研究課程で意識下に形成された「信念」や「好み」といったものである⁽¹¹⁾。従来日本の研究者はこれに関心を持ち、研究自体を「根本から問い直す」という態度が欠けていたことも事実である。ここでさらに踏み込んで、上記書物の219頁以降に『補稿「認知科学の方法」について』と題して、戸田正直氏の短いながら本論文テーマに密接な内容の論文が掲載されているので、引用しつつ議論を進める。

氏は佐伯氏の「メタ理論」に対比して、「スーパー・スキーマ」を提唱している。このスキーマという言葉については、すでに筆者らは書物や論文の中で記述しているので極く簡単に触れると、1932年のF.C.Bartlettの著=Rememberingで記憶におけるスキーマの役割を強調する理論を示めし、最近の認知科学等におけるスキーマ理論の大きな発展を先取りしている。現在ではスキーマを

基本的な構成単位として知識構造を考えるため多くの人に用いられている。研究者によって、スキーマ理論の考え方の細部は異なるが、スキーマが一般的な或いは典型的 (Prototypic) 知識を構成する単位となる点では一致している。

戸田氏が「メタ・理論」の代りに導入した、「スーパー・スキーマ」は広範囲な学問分野の研究においても、詩をはじめとする文学作品の創作等の芸術的創造活動など広範囲に適用可能であると筆者らは考えている。

創造性と情報処理科学については認知心理学の水準に至るまで論ずべきことは多いが、日本人には不得手な側面にのみ触れ、他の多くの事柄については割愛する。

3. 詩の創造性における位置

本章は本論文の最も重要な部分である。詩は他の分野、例えば自然科学や諸工学分野などを始め、他の文学形成よりも鮮明にその創造の課程に関する構成要素の諸関係を浮び上がらせるばかりでなく、一般に最も深い衝撃を人間に与える。古代から現代に至るまで、アジア、ヨーロッパを問わず、詩ほど重要な役割を演じてきた文学媒体はないといって過言ではない。ラテン詩人であるホラティウスは彼の著書 (『詩論』Ars Poetica, 377行—372行) のなかで次のように書いている。

人間も 神々も 本屋も
詩人が二流であることを許さない

これは全ての文学形式が創造力の主要形式であるには違いないのであるが、特に詩こそ、獨創性によってのみ生命を得るのである。他のジャンルでは創造性に若干欠ける人々もその存在価値は全く失われないが、詩こそ人類に未来に対する展望を与え、眞・善・美について魂の高みからのメッセージを伝えるものであり、時には深い哲学的或いは宗教的靈感を時代を越えて伝えるもののみこそ、存在価値を持つといっても過言ではなからう (またこれは眞に創造的なものであるならば他の分野の作品についてもいえることであろう)。筆者らは創造及び獨創という言葉を使ってきたが、これは実は恐るべき言葉であり、無からの創造は本来神のみの仕業であり、この近代文芸の根本的観念は18世紀の言語学者達によって始めて認められたのである⁽¹²⁾。

3-1. 創造性の本質と詩

ロロ・メイの『The Courage to Create』(1975)の訳書 (『小野泰博訳「創造への勇氣」誠信書房 (1981)』) 第2章 (39頁) 以下で、彼は創造性に関する心理学的研究の50年間の後に創造性には本物と偽似的なものがあり、前者と後者の区別は出会い (Encounter) の有無によると結論している。彼は芸術家や科学者に限らず、天

才的な創造性は、強烈な出会いによるものであり、「吸収される」、「巻き込まれる」や「完全に包み込まれる」等々とその認識の強烈さや意識の高揚と（不安や恐怖でなく）歓喜があるとしている。—今日の文明社会のメカニズムによる人間への種々の影響はマイナスの作用を及ぼすと筆者らは考えている。メイはさらに創造的人間の自分の世界との出会いについて、前章の58頁以下で論じている。これもまた芸術家に限らず科学工学等の研究者にとっても極めて重要なことである。要するに芸術家は作品の創作により、彼らの世界を描いているのであり、科学者は世界の根源的な姿を把えて示していると筆者らは考えている。詩人もメイの云うとおり、「徹底的に意識的な人間と当人の住む世界との出会い」をモメントとして詩を創作するのである。メイは前述の書物の23頁以降「プロメテウスの戦い」という節で、創造過程の生き生きとしたシンボルとして、プロメテウスの神話に触れている。筆者らはここにゲーテのPrometheusと題する1774年の作の詩を引用し、ゲーテの自分の世界との出会いを示す。

Bedecke deinen Himmel, Zeus,
Mit Wolkendunst!
Und übe, Knaben gleich,
Der Diesteln köpft,
An Eichen dich und Bergeshöhn!
Muß mir meine Erde
Doch lassen stehn,
Und meine Hütte, die du nicht gebaut,
Und meinen Herd,
Um dessen Glut
Du mich beneidest.

Ich kenne nichts Ärmer's
Unter der Sonn' als euch Götter!
Ihr nahet kummerlich
Von Opfersteuern

Und Gebetshauch
Eure Majestät
Und darbet, wären
Nicht Kinder und Bettler
Hoffnungsvolle Toren.

Da ich ein Kind war,
Nicht wußte, wo aus, wo ein,
Kehrte mein verirrt Aug'
Zur Sonne, als wenn druben wär'

Ein Ohr, zu hören meine Klage,
Ein Herz wie meins,
Sich des Bedrängten zu erbarmen.

Wer half mir wider
Der Titanen Übermut?
Wer rettete vom Tode mich,
Von Sklaverei?
Hast du's nicht alles selbst vollendet,
Heilig glühend Herz?
Und glühtest, jung und gut,
Betrogen, Rettungsdank.
Dem Schlafenden dadoben?

Ich dich ehren? Wofür?
Hast du die Schmerzen gelindert
Je des Beladenen?
Hast du die Tränen gestillet
Je des Geängsteten?
Hat nicht mich zum Manne geschmiedet
Die allmächtige Zeit
Und das ewige Schicksal,
Meine Herrn und deine?

Wahntest du etwa,
Ich sollte das Leben hassen,
In Wüsten flichn,
Weil nicht alle Knabenmorgen-
Blümenträume reiften?

Hier sitz' ich, forme Menschen
Nach meinem Bilde,
Ein Geschlecht, das mir gleich sei,
Zu leiden, zu weinen,
Zu genießen und zu freuen sich,
Und dein nicht zu achten,
Wie ich.

3-2. 創造性と無意識と詩

レイは前記の書の65頁以降に無意識の問題と創造性について記述しており、A.アインシュタイン、更に詳しく、H.ポアンカレがアイディアを得た時の無意識の状況について説明している。そして孤独を建設的に使う能力の必要性和無意識からの洞察を体験したいならば積極的に自らを孤独にゆだねるべき事について記述している。そして彼はC.ユングの無意識的体験と意識的体験の両極性と補償的性質に触れ、この2つはダイナミック

な一種の戦いを行っており、「ひらめき」は何かを破壊するのであり、眞の創造的な仕事に付随する罪意識の根源を指摘している（「あらゆる創造行為は、まず何よりも、破壊行為なのである」（ピカソ））。さらにそれを乗りこえることにより、満足感が生じ物理学者を始め自然科学者たちが「エレガンス」な理論を得たとするのと同様な美的体験をするとし、前意識や無意識から出てくる創造性は、美術や詩や音楽にとっても重要で本質的なものであるとしている。そして、従来の秩序や体制の破壊者となり得るし、政治的、道徳的、経済的、科学的等々の独断者の脅威となりうる、創造者と共に芸術家の場合、その抑圧やコントロールは芸術の死を意味すると述べている。これは科学や工学においても同様で、H.スタッフォード、ハット、フィールドは発明家の性格として10項目あげている中の最初に「発明家は反抗者であり、執ような質問者であり、反逆者である」としている。われわれ人間は洋の東西を問わず、その創造性において不思議な一致を見ることがある。優れた発明の申請が、ヨーロッパ、アメリカ、日本から同じ日に殆んど同じ内容で複数件ある場合もある。本節の末尾にイギリス詩人、E. スペンサー（1552-1599）とイタリアの詩人T. タッソー（1544-1595）が彼等の詩の創造の、同時代における、驚くべき内容の一致と、その美的繊細さの類似性は、二人の詩人が、母国語の異なるにもかかわらず、意識下の世界が同じようなものであることを示していると思われる。

Ah see, who so faire thing doest faine to see,
In spring flowre the image of thy day;
Ah see the Virgin Rose, how sweetly shee
Doth first people forth with bashfull modestee,
That fairer seemes, the lesse ye see her may:
Lo, see soone after, how more bold and free
Her bared bosome she doth broad display:
Loe, see soone after, how she fades, and falles
away.

ああ 極上の美をみんと希うものたちよ
春咲き匂う花の中に生涯の映しをみよ
ああ 乙女の薔薇をみよ かわいらしく
つつましい羞らいで芽を吹くさまを
ひとめをしのぶ その美しさを
だがみよ やがて 凜々しくおどかに
裸の胸をあらわにさしだすさまを
みよ やがて 色褪せ 落下するさまを

Deh, mira, egli cantò, squntar la rosa
Dal verde suo modesta e verginella,
Che mezzo aperta ancora e mezzo asosa,

Quanto si mostra men, tanto è piùbella
Ecco poi nudo il sen già baldanzosa
Dispiega; ecco poi langue, e non par quella:
Quella non par che desiata ivanta
Fu da mille donzelle e mille amanti.

3-3. 創造性のフォームと詩

前節で取り上げた、無意識の問題と共に、イマジネーションと創造性に関連する文献は多数にのぼっているのでも本論文では立入った議論はさける。ただ人間のもつイマジネーションの多様性は夢のイメージを含めて、ほとんど無限といってもよい。しかし、人間が、そのイマジネーションを一つの素材として創造した、科学理論や技術的発明というまでもなく、諸芸術作品においても限界が存在する。

人間自体が限られた肉体と限られた時間（一つの人生）を持っている。或る意味で我々の創造性は限界との闘いそのものである。またそういった闘いによって鍛えられるのである。ここで芸術における限界—フォームについて、特に詩のフォームの問題を取り上げよう。詩のフォームとひとりで云っても、非常に多岐にわたる。それは前報でも少し触れたが、欧米の詩を中心に例示をなし、議論をすすめることにしよう。ゲーテの詩で、彼のもっとも優れた詩の一つとされ、ドイツ語で書かれた形式としてほとんど完璧であるとみなされている詩を示す。

WANDERERS NACHTLIED

Der du von dem Himmel bist,
Alles Leid und Schmerzen stillest,
Den, der doppelt elend ist,
Doppelt mit Erquickung füllest,
Ach, ich bin des Treibens müde!
Was soll all der Schmerz und Lust?
Süßer Friede,
Komm, ach komm in meine Brust!

Über allen Gipfeln
Ist Ruh,
In allen Wipfeln
Spürest du
Kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde.
Warte nur, balde
Ruhest du auch.

ゲーテの詩については、あらゆる批評を絶しているドイツの批評家たちが云ってきっていたが、前報⁽⁸⁾にも記

述したように表現主義者たちはきびしい批評を行っている。H.ヴァンデルは詩を始め芸術作品は形式と内容とから成り、形式はどんな内容をも受け入れる独立の有機体であるとしている⁽¹³⁾。そして、真の芸術家とディレクターは形式すなわち同じ限界をもつが体験の造形としての芸術で、形式が特に、問題となり、さらにリズムが問題となろう。前述のゲーテの詩は確かにそれらの諸点において一見優れているが、知識という非芸術的手段を用いており韻律法も律動法も恣意的であって、語の結合の芸術的造形はないとの批評がなされている⁽¹³⁾。筆者らは現代の言語理論的分析用具をもっており、これも時代と共に進化発展するのを知っている。それと同様に芸術のフォームも時代と共に変化するのであり、芸術の制約的要素として、フォームを批判されるとき、いかなる天才といえども無傷ではありえないであろう。前述したように限界との闘いが創造性そのものであるということの実証的事柄として、5、7、5のリズムから完全に逸脱した俳句形式の試みもなされているが本論文では触れず別の機に論ずる。要するに創造性は自然科学、工学諸分野、宗教、哲学等分野を問わず、人間が何ものか新しく、また価値があり、さらに未来への架橋となるものを生み出し、あるいは構築し、製作する過程にあるものである。したがって、新しいフォームの確立は創造性の一つの大きな要素でもあろう。丁度新しいデザインの商品が次々と製作されるように、内容をもる器としての形式に対する闘いも、必要であろう。

次いで僅かな例にすぎないがフランス詩からそのフォームを記述する⁽¹⁴⁾。以下対立の原則に関して述べよう。

i 語彙的対立（親族関係の語彙の脚韻）

Le ciel est, Par-dessus Le toit,
Si bleu, si calme!
Un arbre, par-dessus le toit,
Berce sa palme, (Verlaine)

ii 意味論的対立（同音異義の脚韻）

Ont du plaisir et liesse abondance :
On chante, on rit ; qui le corps a la danse.
(G. Cretin)

Gloire du long desir, Idées ;
Taut en moi s'exaltait de voir
La famille dies iriées
Surgir à ce nouveau devoir

(Mallarmé)

以上は一例にすぎないが、欧米の詩はその源が古代ギリシャの叙事詩にあたり、荘重典雅なクラシカルな押韻詩に始っている。また中国の詩も、詩句、文字数に定めがあり平仄なる煩瑣な詩形式上の法則がある。これらに

対して、日本ではその上古に発生した詩はすべて無韻素朴の自由詩である。前報⁽⁶⁾に記載した、万葉調の長歌と反歌（中村 詠 ポミコルがドイツ訳）は、万葉に見る、7、5音の定形律の形式を取っている。これらは、日本が大陸、特に中国と交流が盛んになってから生じたものである。しかしこの万葉の長歌および短歌は韻文として極めて大まかなものである。欧米の厳格な韻文に比し、極めて非形式的な自由主義のものと云える。これらはドイツ語の音律（ニイチェは軍隊調として批判）の男性的に比して、女性的な優美さをもっていると考えられる。前者は叙事詩に、後者は抒情詩の表現に適すると考えられる。このような問題点も今後共同研究によって深めて行きたいと考えている。

3-4. 詩（創造）に関連する批判的考察

3章で前節までに取り上げた事柄以外にも触れるべき多くの大切な要素はあるが、ここでは割愛し、本節では「広義のシステム論」⁽¹⁾に立脚し、テーマにそって議論を進める。筆者らの方法論の範囲内にコネクショニズムを提唱する人達がいる。J. Campbell は彼の著書《The Improbable Machine - What the Upheavals in Artificial Intelligence Research Reveal about how the Mind Really Works》(1989)；中島健訳「柔かい機械」青土社(1990)で、人間の脳内にはパラレル処理可能なニューロンのネットワークがあるので、パラレル処理可能な（コネクショニスト・ネットワークによる）コンピュータで人間精神のシュミレーションに期待をかけている。コネクショニズムについては別途取り上げることとし、ここでは単にこの方法は従来の人工知能が無視して来た分野、すなわちパターン認識・知覚・内容連想記憶などにおいて、多くの研究成果をあげうるものと期待されることを強調しておく。これは従来の人工知能研究と異り、筆者らの提唱するように、人間が極めて長い時間をかけて、現在迄進化して来た歴史の産物としての理性や、現世的ないわゆる知能について、単にアカデミックな思想家のアプローチよりもさらに進んで、例えば小説家や詩人達が（哲学者等が明確には把握していない）身体的、現世的な文脈においてとらえ得るものである。

何人かの研究者は確かに今日の精神が行うあらゆることは、原理的にはコネクショニスト＝システムの観点から説明できると信じているが、これが人間知能の実際の働き方だという思い上りはない、とJ.キャンベルは謙じている。筆者らは、上記の何人かの研究者達はより謙虚になる必要があると考えている。コネクショニズムをも包含している「広義のシステム論」でも、精神が行うあらゆることを原理的とはいえ原時点て説明しつくせないと考えており、さらに多くのものを批判的に攝取しつつ

そのようなものに漸近しうるのであろうと見ている。

本節の問題に限定したとして、詳細論すればかなりの大著をもつてしても足りないくらいである。そこで2-2で触れた、スキーマ論に絞って本節の議論を集束に導こう。人間の知識構造に関する考え方の中で文章理解の研究と直接関連性をもつのがスキーマ理論《Rumelhart & Orton: "The representation of information in memory" (1977)》である。このスキーマ理論についてのみ論じても膨大な紙数を要するのでその創造的側面のみ触れよう。R. C. Schankは1980年に理解の創造的側面を可能にするメカニズムとしてMops理論を提唱している。彼は人が経験を重ねることにより、何層もの記憶構造にそれをバックしておき、新しい情報に対して、アナロジーにより、関連性の高い記憶を呼びおこし、新しい構造を創造するとしている。これはスキーマ理論にもとづいた比較的初期の研究である。このように創造性とスキーマ論の関連性は比較的期間的にも研究数も僅かであり、前述の佐伯胖氏の書物⁽¹¹⁾ (1986) が筆者らの知るかぎり最も新しいものである。原時点においてはテーマにあげた批判をあえて記せば、それはこの分野はいまだ未熟であるということであろう。しかし2-1に記述したF. C. Bartlettの1932年の著書はスキーマ論が知覚や想像や思考から独立したものでなく、それと密接な関係があるとし、簡単な図形などで知覚実験を行い、次のことを見出している。「被験者が単純な図形を知覚したときはまず、命名反応が起り、図形が既知のものでないときは類似の他の図形を探し、それで命名する。また複雑な図形を部分から除々に全貌を呈示するようにすると被験者はその図形をどのように構成すればよいかというプランを考える反応を起す。」等の内容である。また彼はイメージについての実験を行っているのである。このようなスキーマ理論自体かなり早くから、いわば健全なスタートを切ったと見ることができる。ただ創造性との関連性については比較的これまでは少かったというに過ぎない。今後われわれはさらに研究を深めたいと思っている。

本論文を終えるに際し、前述のソシュールやチョムスキー等のみならず、欧米の研究者達の根底を流れる研究に対する使命感ともいうべきものにつき触れたい。これは学問的あるいは文化的伝統にもとずく差異であるのかも知れないが日本の研究者の場合、多くはどちらかといえば業績優位の場合が多く、個性的でない場合もある。二十一世紀に向って文化の担い手の一翼である研究者は現世的にたとえ恵まれなくとも、あるいはクーンのいう所の通常科学の範囲に安住せず、労苦に比較し、業績面で恵まれる可能が少なくとも、現パラダイムに挑戦すべきである。たとえその創造性における戦いに敗れ、ほん

のささいな、新パラダイムの樹立をすらし得ずとも、その挑戦は使命に忠実なのかも知れない。

4. むすび

本論文テーマについて、ドイツ語と日本語とそれぞれ母国語を異にし、さらに専門を全く異にする二人の研究者の共同研究の一部を記述した。これは前報⁽⁸⁾につづくもので、人間の魂に関連する詩につき、またこれと創造性との間の問題であって、このような小論文に盛るためには非常に多くの内容を前報同様割愛せざるを得なかった。しかし、共同研究の成果として、本年(1992年)この2編を始め、他にも論文を作成しており、言語理論に関連する共同研究による論文は少なくとも本年3件となった。

このような学際的研究、専門を異にする研究者の共同研究は有意義な事と考えられる。我々はさらに緊密な連絡を保ちつつ研究成果をあげていく所存である。

参 考 文 献

- (1) 中村孔治：「広義のシステム論による法社会学方法論の発展」鉾脈社 (1987)
- (2) 中村孔治：「現代科学方法論の形成過程とその発展」鉾脈社 (1987)
- (3) 中村孔治、他二名「情報処理工学における現代言語学研究に関する批判的検討 (I)」―「広義のシステム論に立脚し、ソシュールに関連する言語学における諸問題に対する批判的考察―宮崎大学工学部研究報告第36号 (1990) P.67
- (4) 中村孔治、他二名「同上 (II)」―同上、チョムスキーに関連する言語学の諸問題に関する批判的考察―同上、第36号 (1990) P.59
- (5) 中村孔治、他二名「同上 (III)」―同上、論理実証主義の言語学に関する批判的考察―同上、第36号 (1990) P.95
- (6) 中村孔治、他二名「同上 (IV)」―同上「番羽訳」の問題に関する批判的、考察―同上 第36号 (1990) P.105
- (7) 中村孔治、他二名「同上 (V)」―同上、幼児の言語獲得に関する諸議論に対する批判的考察―同上、第36 (1990) P.119
- (8) 中村孔治、ポミコル・ヤン
情報処理科学における現代言語学研究の問題に関する批判的検討 (VI)―「広義のシステム論に立脚し、詩に関連する言語学的諸問題に対する批判的考察」(其の一)―秀文社出版 (1992)
- (9) 中村孔治、他二名：大学教授法に対する認知科学的手法によるアプローチ (V)―電磁気学のカリキュラムにおける「創造性」に関する考察―宮崎大学工学部研究報告、第34号 (1988) P.28
- (10) Silvano Arieti: "Creativity-The Magir Synthesis." (1976)、加藤、清水訳「創造力―原初からの統合」新曜社 (1980)
- (11) 佐伯胖：「認知科学の方法」東京大学出版 (1986)

(12) 深瀬基寛：「エリオットの詩学」創元社（1953 P.34）

(14) Jean Magaleyrat：『Elements de metrique francaise』Paris

(13) Herwarth Walden：『Einblick in Kunst』（1917）u.s.w.、本郷、
内藤、飛鷹、山口編訳「表現主義—芸術のための戦いの記録
（1910-1939）」白水社（1983 P.171）

Aramd Colin（1974）、海沢他5名共訳「フランス詩法」海出版社
（1980 P.273,P.276）